

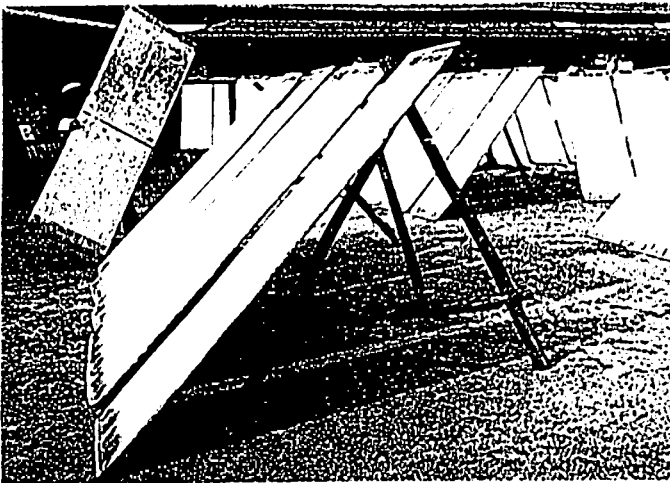
平成七年九月二四日（日）

第二二二回

史跡めぐり

和紙のふるさと・小川町

主催 越谷市郷土研究会



第二三二回 史跡めぐり

日時 平成七年九月二四日(日)

集合 JR南越谷駅 午前八時

行先 小川町周辺

コース 往路 南越谷⇨北朝霞⇨朝霞台⇨小川町

八宮神社↓埼玉伝統工芸会館(昼食)
西光寺↓龍谷薬師堂↓和紙資料館↓
円城寺

復路 小川町⇨朝霞台⇨北朝霞⇨南越谷

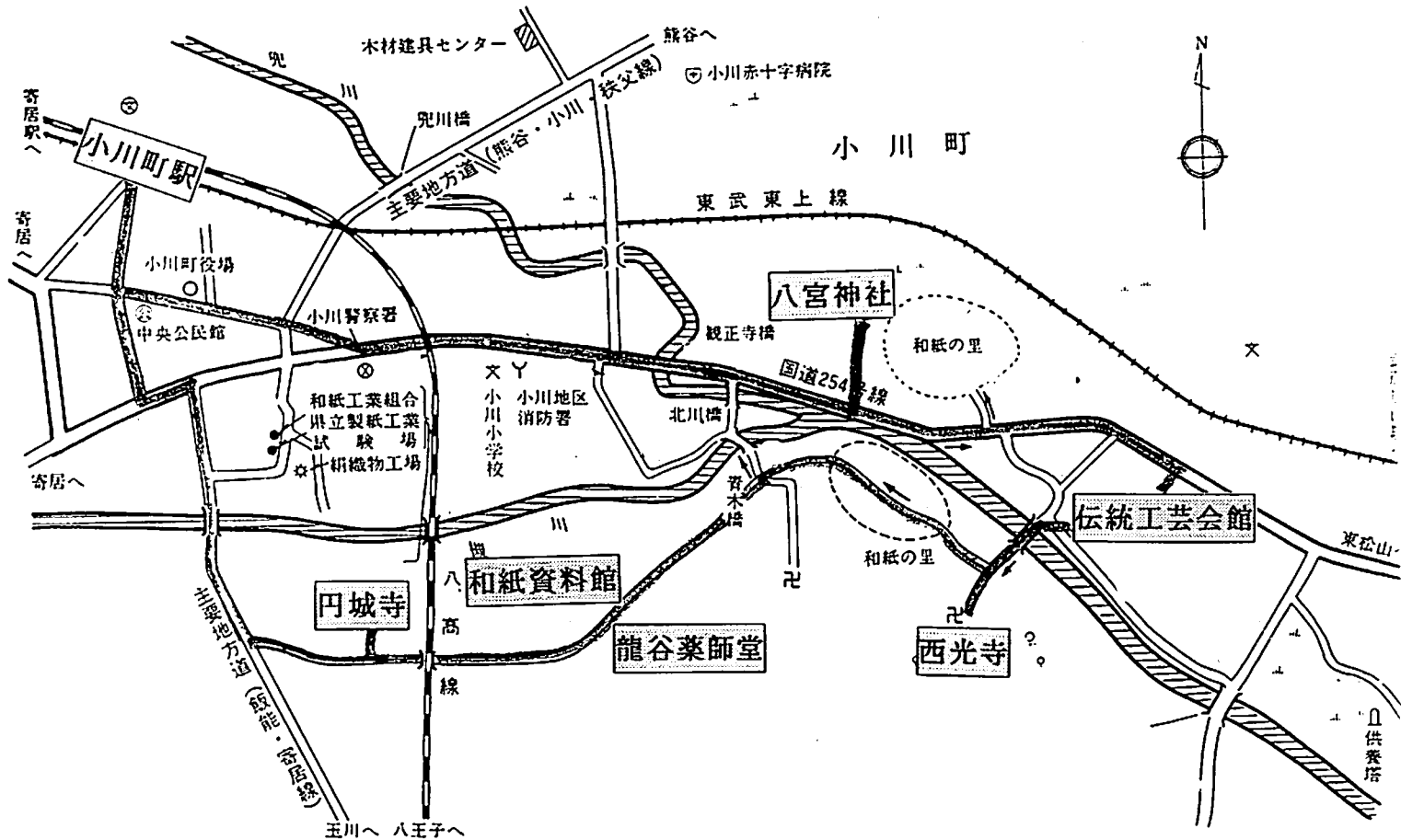
案内理事 小原 勘三郎

参加費 三〇〇〇円(交通費・資料代・入場料・

保険料・その他)



格子戸と土蔵の古い町並みに和紙のふるさとを訪ねる



八宮神社

八宮神社

江戸初期、一六一六（元和二）年、勧請と伝えられる。祭神は五男三女神の八柱の神とも、又、一説には近郷に同じ祭神の八社があるところから、八宮神社と称すると伝えている（比企郡神社誌）。本殿の彫刻は、妻沼聖天院と同じ彫師と
あおき
 という。

青麻三光宮

珍しい名の社で、全国的に数すくない。祭神は各地で異なるのも不思議だが、ここでは少彦名命である。昔より、温泉の神・医薬の神・酒の神として信仰がある。又、砂鉄の神として鑄物師たちの信仰もあつた。江戸期には、山伏たちによつて、この神を信仰すれば中風にかからないとされた。草履や草鞋を奉納して、足の病氣（中風）にかからぬよう願つた風習があつた。

人面塚

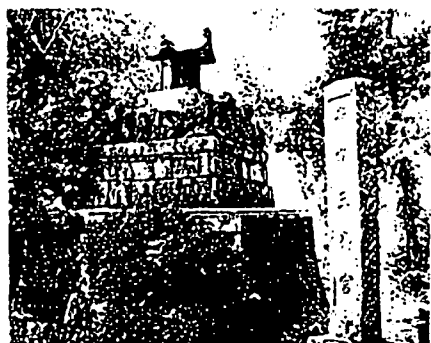
人面塚

近くの水田より出土。

人仏ともいい、痘瘡神として信仰されている。鎌倉期のもので、形としても珍しい。供養塔である。

諏訪神社

祭神は建御名方神である。



「青麻三光宮」



和紙ができるまで

一、煮熟（かずに）

楮白皮を煮る

二、かつさあし

ごみを取る。

三、手打ち

丹念に叩き、

水に溶く。

四、どろどろに溶かした楮の繊維と、トロアオイの液がはいったものを混ぜる。

五、「す」で何度もすくいあげて一枚の紙にする。

六、水を絞った紙を板にのせ、天日で乾燥。

和紙の歴史

小川の手漉和紙の歴史は古く、一二〇〇年前ともいわれている。一大産地となるのは、江戸開府後、江戸の発展に伴って、紙の消費がふえたのである。

「細川紙」 小川和紙を代表する紙で、もとは紀伊・高野山麓の細川村で漉かれた細川奉書である。それが江戸に近い小川町に移されて発展した。小川を中心に比企・秩父・男衾三郡で生産される和紙は、江戸市場を占有するようになった。「ピッカリ千両」というとおり、好天に恵まれると千両になるといわれた。

明治以降、洋紙の普及で一〇七〇戸あった漉屋は、現在十五戸になった。昭和四三年、国重要無形文化財に指定された。楮皮を原料とした丈夫な和紙は、諸帳簿・文庫紙・蚕封紙にも使用されてきた。

明治政府が発兌した紙幣も、この紙で漉かれた。

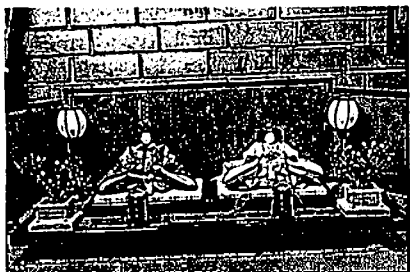
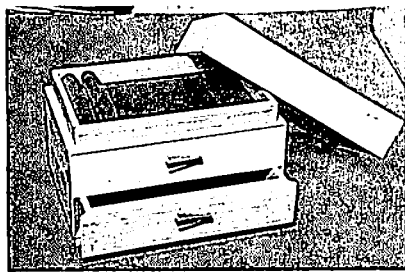


埼玉伝統工芸会館

小川和紙をはじめ、県内二十八品目（雛人形・足袋・達磨・釣竿・羽子板・鬼瓦など）の埼玉県指定の伝統的手工芸品が産地の紹介パネルと共に展示されている。

また、後継者育成や異業種間の交流と新製品開発を目的としている。

このような工芸品は、消費文化の波に押しされ、顧みられなくなった時期もあったが、近年、その伝統の技と磨きぬかれた美しさが、見直されてきている。優れた技術と伝統に裏打ちされた品々が、時間と手間をかけて創りだされる「ものづくりの原点」を問いかけてくるようである。





〔山門〕



曹洞宗瑞竜山西光寺

嵐山町遠山寺末（新篇武蔵風土記稿による）

本尊 釈迦牟尼仏

開山 一六〇六（慶長十一）年

一五三三（天文二）年に遷化した西光院殿前黄門瑞竜浄喜大居士の御

〔二連板碑〕

名をとり、瑞竜山西光寺と号す。

一五九七（慶長二）年、江戸幕府より寺領十石の朱印をうけ、以後、歴代將軍より下賜されていた。

二連板碑 小川町連碑七基のうちの一基

右 一三六八（応安元）年 道阿逆修

左 妙性禪尼

奪衣婆像

本堂内に祀ってある閻魔様の前にあるこの像は、「じょうずかのお婆さん」と呼ばれ、真綿を一かせ納めて、子育ての祈願をする風習があった。



龍谷薬師堂

この堂は、西光寺の四世石春が建立し、薬師如来を本尊として安置したもので、石春庵ともよばれている。

薬師如来立像

古くより目の守り本尊として、近在の人々に信仰された。平安末期、十二世紀後半につくられた平安仏である。

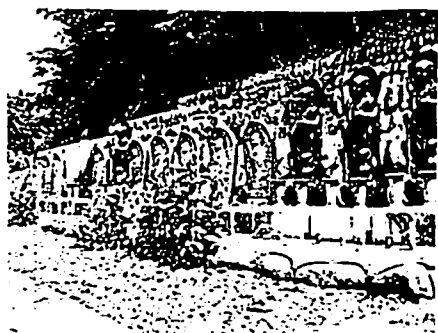
像高九七、三cm。その表現は「仏の本様」といわれた定朝様の特色を伝えている。当時の様式・技術に画一されたタイプの一つである。洗練された彫技からみて、中央仏師の手になるものらしい。作者不明。脇侍の日光・月光菩薩・十二将神は、一六九八（元禄十一）年ころのもの。



〔薬師如来立像〕



〔みかえり地藏〕



〔水子供養〕

曹洞宗北青山円城寺（越生町龍穩寺末）

本尊 阿弥陀如来

創建 青木氏房が平家方に属し、宇治川の戦いで敗れ、その後、平氏没落により氏房の子が出家し創建した。

一一九一（建久三）年、源頼朝より五十貫の朱印をうけ、青木家十七代の青木信濃守が開基とされている（青木家文書）。

戦国末期

一六四九（慶安二）年、江戸幕府より寺領七石の朱印をうける。

後北条時代に焼き討ちにあい、石塔婆のほか中世のものは残っていない。

〔円城寺山門〕



〔二連板石塔婆〕



二連板石塔婆

右 一三二五（正中二）年閏正月四日と刻まれ、一三四六（貞和二）年九月十六日比丘尼道阿と追刻されている。

左 一三六一（延文六）年三月一日の紀年銘がある。

図像塔婆
一三二八（嘉暦三）年の紀年銘がある。



「我之名号一經其耳
衆悉除心身安樂」
と記されている。
現在、本堂内に保管されている。

